

岐路に立つあいりん地域の多層的セーフティネット

大阪市立大学 白波瀬達也

はじめに

高齢化率と生活保護受給率が著しく高い西成区を改革するための「西成特区構想」計画が2012年1月に橋下市長によって提示され、2012年2月には西成区長を中心とする「西成特区構想プロジェクトチーム」とプロジェクトを推進するための「西成特区構想有識者座談会」が組織された。西成特区構想はあいりん地域のあり方を抜本的に見直すことで、西成区全体の、さらには大阪市全体の活性化につなげていこうとする大規模な都市再生のプロジェクトである。本発表は西成特区構想の「光」と「影」を整理し、とりわけ「影」の部分に焦点を当てる。

1. あいりん地域の概要

あいりん地域は大阪市西成区の北東部に位置する人口密集地域である。高度経済成長期における労働力需要の急激に高まりに伴って、全国から大量の単身男性労働者が集まった。あいりん地域は政策的に単身労働者の街と化し、家族世帯が地域から姿を消していった。バブル経済崩壊以降、あいりん地域における寄せ場機能の弱体化は顕著になり、1990年代中頃にはあいりん地域のみならず、市内全域にホームレスが拡散した。その後のホームレス対策によってホームレスの数は表面的には減少した。一方、2003年以降、あいりん地域に暮らす住所不定者への生活保護制度の適用が進み、月極の賃貸住宅に居住する者が増加した。2010年には釜ヶ崎の住民の3分の1が生活保護受給世帯になった。

2. あいりん地域におけるセーフティネットの多層性

あいりん地域は社会的に不利な立場の人々が歴史的に滞留・集住している。そのため、あいりん地域では背景を異にする様々なアクターがセーフティネットを構築してきた。こうしてできた多層的なセーフティネットが、様々な困難を抱えている人を包摂してきた。

3. あいりん地域における社会資源のネットワークを図る西成特区構想

『西成特区構想有識者座談会報告書』では「短期的対策」として、①高齢日雇労働者、野宿生活者、生活保護受給者の就労支援、②治安問題の改善、③不法投棄対策、④公園テントの平和的な解決、⑤結核対策、⑥貧困問題に対する総合的支援体制構築の6つが挙げられている。「中長期的対策」として、⑦貧困等の課題の多い子育て世帯への支援策、底上げ策、⑧子育て世帯の呼び込み策、⑨市の未利用地の戦略的な活用、ハウジングとまちづくり、⑩教育振興策、⑪観光・国際振興、アート振興策の5つが挙げられている。合計11の対策から構成された西成特区構想は、目の前にある諸問題の改善を図りつつ、地域の大規模な再開発を通じて財政健全化・経済活性化を達成しようとする試みである。

まとめにかえて

あいりん地域の多層的なセーフティネットは西成特区構想という大規模な再開発プロジェクトが駆動するなかで岐路に立たされている。市場の原理が貫徹されるなかで、彼らの「生きていく場所」が奪われるリスクは高い。あいりん地域に暮らす人々は、多層的なセーフティネットとの関わりのなかで生活していることが少なくない。西成特区構想は、当座あいりん地域に暮らす人々に「手厚いケア」を提供しつつも、粛々と「再開発」を通じて、地域を再編していくことが予想される。あいりん地域は約40年間に渡る紆余曲折のなかで今日のセーフティネットを練り上げてきた。このセーフティネットは容易に転移できるものではない。よって、あいりん地域の再編は、コンフリクトや排除が可視化されにくいレベルで拡散・遍在していくプロセスでもある。